女性医師支援センター便り

第６回女性医師支援セミナーが開催されました

平成24年７月21日（土），勝山館にて宮城県女性医師支援センター主催による第６回女性医師支援セミナーが開催されました。女子医学生から結婚子育て中の女性医師，男性医師まで46名の方々にお集り頂きました。本セミナーでは託児所が設置され，実際にお子さんを連れて参加された先生もおられました。

特別講演：「臨床医としてずっと活躍していただくには・・・」

藤田保健衛生大学脳神経外科教授，総合救命救急センター長　加藤　庸子先生

座長：宮城県医師会常任理事，日本医師会女性医師支援委員会委員　高橋　克子先生

結婚，出産，子育てをする30代前半までの卒後10年間に離職し，専門医や学位取得，昇進などキャリアの継続はおろか，休職期間が長くなればなるほど，自信喪失から「働きたくない」といった思考になってしまい，復職できない現状がある。新卒医師の約３割を女性が占めるようになった現在，この離職を防止しなければ，病院勤務医の不足が深刻になるため，様々なサポート体制が重要である。短時間就労支援，院内保育所，復職支援など叫ばれているが，意識改革無くしてその達成は難しい。院内保育所を例に挙げると，設置したものの，敷地内の一等地に造られていないため（狭いスペース，日当り等），実際子供を預ける気にならないこともしばしばである。離職防止には，チーム診療体制など環境整備以外に，産休や育休中こそ，積極的に連絡をとる（存在意義を示す），学位，専門医，指導医取得など付加価値をつけ，motivationを絶やさない働きかけが大切である。

加藤先生はいかなる状況でも，オファーがあれば引き受ける（現職も），自分自身の限界線を引かないことと情熱をもって語って頂きました。さらに，脳外科技術向上のための世界的な支援活動もご紹介下さり，講演終了後，会場は礼賛の拍手でした。

シンポジウム：「女性医師のそれぞれの生き方～キャリアをはぐくむ～」

コーディネーター：宮城県医師会常任理事　佐々木悦子先生

１）「研究職という選択肢も」

東北大学東北メディカル・メガバンク機構

教授　峯岸　直子先生

３人の子育てをしながらの病院勤務（小児科）と比べ，基礎の教室では時間管理が自由（週末や早朝・夜間に集中的に実験）であった。研究支援体制も変化し，体力勝負の時代ではなくなっている。研究，論文作成により，倫理的思考を身につけられ，キャリアが中断しないため，選択肢の一つとして考慮して欲しい。

2）「呼吸器内科医として働いて」

仙台オープン病院　呼吸器内科部長　進藤百合子先生

仙台オープン病院は数々の学会認定施設で，学会活動も盛んである。母の協力もあり２人の子育てをしながら約20年呼吸器内科医として勤務してきた。しかし子育て中は時間制限があり，優先順を決めて行動するしかなく，患者への責任を最優先し，（学会専門医取得など）専門領域の診療に誇りを持てるように働いた。子供が成人した現在は，仕事を続けてきたからこそできる新たな活動（研修医指導，市民公開講座，呼吸器内科学会の女性医師支援等）を行っている。

3）「出会いとご縁」

東北大学　神経内科　助教　竪山　真規先生

神経内科の医局で，子育て中の女性医師が他になく，子供が幼かった時は時間の制約があり，職場の同僚に負担をかける事が心苦しく，負い目を感じていた。その中で筋病理診断学の研究に重点を置き，それを確立し，今年より病棟医長として勤務している。現在は，できない時期は無理をせず，できるようになったら役割を果たして貢献すれば良いと考えている。

加藤先生も交えたディスカッションの中で，医師人生を40年とすると，子育て期間は約10年程度であることから，何らかの形で継続して医学に携わっている事が，子育てが一段落した後の20年の医師人生を有意義なものにするというメッセージが参加者に伝わったと思います。

引き続き行われた懇親会では，特別講演の加藤先生が，医学生の方や子育て世代の女性医師と積極的にお話されているお姿が印象的でした。後日，私の元に激励のお手紙が届き，女性医師支援に対する情熱と細やかなお心遣いに感服しました。

また，当日，宮城県女性医師支援センターのホームページをみて参加した，休職中の先生と会いました。彼女は初期研修中に出産，初期研修修了後５年ほど休職中で，志望科も未定で，医師として働こうと思っても働けるのか不安に思っているようでした。初期研修のおさらいと後期研修がどこかでできないものか，諸先生に相談したところ，東北大学病院の総合診療部で研修を行っているということで，一気に進展しました。彼女が医師として働く誇りを一日も早く取り戻せるようメンバー一同応援しています。

宮城県女性医師支援会議委員
東北労災病院大腸肛門外科
生　澤　史　江